

# 原子力発電と意見広告

ある広告審査の情景に思う

## 一 原子力発電に関する

### ある超ミニニコミ紙

原子力発電についての人々の意見がさまざまに分かれることは、事の性質上やむをえないことであろう。そして、それが人類の将来の命運にもかかわる問題であるだけに、できるだけ多くの人による十分な、徹底した意見の表明と交換のうち、事に運ばれることが望ましいところである。

今年も新年早々世界の耳目を集めたのは、フランスから返却される高レベル放射性廃棄物の日本への輸送問題であったが、この厄介物の行き先は青森県の下北

半島むつ小川原港であった。

そもその下北と核燃料基地との関わりを振り返ってみよう。

話は、当時新全総と呼ばれた国の第二次全国総合開発計画（一九六九年）に乗せられて、県が描いた陸奥湾・小川原湖大規模工業開発計画に始まる。総面積一七五〇〇ヘクタール、石油日量一五〇万バレル、電力一〇〇〇万キロワット、鉄鋼三〇〇〇万トン、投資総額六兆円、一五年後には青森は工業県、小川原は二〇万都市、といった数字に県民もマスコミも踊らされた。第三セクターのむつ小川原開発株式会社がつくられ、強引に農民を説得して三二六三ヘクタールもの土地を買収した。

ところが、この石油基地計画は石油シ

農民から奪われたものである。というのは、本来地元の開発と発展のためと説得されて手放した土地である。その計画が潰れた以上、これらの土地は農民に返却しなければならぬ土地なのである。それを知らぬ顔をして、核燃料基地に転用し、さらには、核のごみの捨て場とされ、高レベル放射性廃棄物まで運び込まれようとしている。

この春の知事選挙で、これまで核燃料基地化を推進してきた北村知事が敗れ、二月二六日に就任した新しい木村知事によつて一日だけむつ小川原港における陸揚げが延ばされて話題をまいた。しかし、肝心の日本全体の原子力発電の廃棄物をどこにどう始末するかについて、推進者のだれ一人成案をもっていないのである。二〇一〇年までに原子力発電を全廃することを決めたスエーデンが、早くも、使用済み核燃料の最終処分のための研究施設を完成させたと伝えられるにもかかわらず……（朝日新聞一月一三日夕刊による）。

私も、この問題にはかねてから深い関心をもち、その関心に基づく行動のなかのひとつとして、「きよなら原発 恐山をおそれる会」という名の、あるささやかな運動に共感を覚え、これに、これもまたはなはだささやかな支援をしてき

ョックのためあえなく挫折した。大量の借金と土地をかかえた第三セクターの後日談として、まず、石油備蓄基地が造られ、そのために築港されたのがむつ小川原港であり、そのための漁業補償の不明朗を突いたのが故米内山義一郎氏のいわゆる米内山訴訟（拙著『時代に挑む法律学』三一五頁、「巨大開発との戦い——米内山訴訟の意義」を参照）であった。つづいて核燃料サイクル基地、すなわち使用済み核燃料再処理工場、ウラン濃縮工場、低レベル放射性廃棄物貯蔵センターの三点セットと称されるものが浮上したのである。

電力業界は、ここにこんな広大な適地があるといって喜んだと伝えられるが、これらの土地はいうなれば、詐欺同然に

た。このグループは、「さよなら原発二  
ニュース」という題の超ミニコミ紙を一九  
八八年二月の第一号から随時発行すると  
ともに、ときおり全国新聞や地方新聞に  
意見広告を掲載することをその運動の特  
色としている。その意見広告のための費  
用を公募するたびに、私もわずかながら  
志を寄せることにしているのである。

## 二 原発反対の意見広告と その審査

ところで、このささやかな運動が今年  
も企画して、朝日新聞の青森版に「放射  
能のツケを子供達の世代にまわしたくな  
い！ もう一度立ち止まって考えよう！  
核燃料サイクルの危険性」という表題の  
二分の一紙面の意見広告を掲載しようと  
した。その内容は主として地質学者生越  
忠氏とのインタビュー記事である。そ  
の原稿を広告社を通じて朝日新聞に提出  
したのが一月一二日、それからそれが二  
月三日に掲載されるまでに、「さよなら  
原発二ニュース」第二四号（二月二日付  
け）によれば、つぎのような内容に対す  
る審査が行われたというのである。ここ  
には、同紙に記載されている審査場面の  
いくつかを選んで紹介しよう（以下の記

事は同会代表の楠幸子氏の記憶に基づく  
記録のそのままの引用である。私は同氏  
を信頼してそのまま紹介するが、もし事  
実と違うという申し入れがあれば、それ  
を紹介することにやぶさかではない。

地震のエネルギーの計算を説明し  
る  
広告代理店Sさん「地震のエネルギ  
ーのところについて具体的に計算して  
説明するようにと広告審査が言ってい  
ます。」

楠「理科年表の公式に常用対数表の  
値を代入して求めると書いて、理科年  
表のコピーもついているんですから、  
それでいいでしょう。」

広告代理店Sさん「それでは駄目だ  
と言っています。」

楠「それは生越先生のおっしゃった  
ことで、私のような素人が知っている  
わけではないんですよ。生越先生は地  
質学者の研究者で博士号をもってい  
っしゃる方なんですから、そんなこと  
を間違はずはないから、そのまま載  
せてくれればいいじゃないですか。  
私だって生越先生の説明を伺ってな  
んとなく分かった程度で、人に説明す  
るなんて大変ですよ。だいいち常用対  
数表なんて家にはないから。」

広告代理店Sさん「そこをなんとか

お願いします。」

そんな訳で、勤めがえりに常用対数  
表の付録のついた数学の参考書をやっ  
との思いで見付けて買って帰った。対  
数表付はその売り場にたった一冊しか  
なかった。ところが、理科系の人に  
うと笑われてしまうけれど、二十余年  
も計算したことがないと、忘れてしま  
い、対数の概念、指数法則を思い出す  
のに三時間もかかった。それから常用  
対数表を使い、広告審査の人にも分か  
るような式を書くのには、また三時間  
もかかった。

他の学者の書いた論文はないのか

広告代理店Sさん「巨大地震が百年  
プラス、マイナス十年周期で起こっ  
ている、来世紀中頃にこのクラスの大地  
震が起こると予想されていました。と  
いうのは誰が言っているのか、と審査  
が言っています。」

楠「それは生越先生が言っていらっ  
しゃるのです。」

広告代理店Sさん「予想されていま  
したという以上通説になっているとい  
うことなので、他の学者の書いたもの  
もほしいといっています。」

この質問は生越先生がまだご在宅の  
内であったので（清水注・生越氏は旅  
行をまじかにひかえておられたとのこ

とである）、先生に電話をかけ質問し  
た。生越先生は、「そういう周期で起  
こっているのですから、聞けばみんな  
そういいですよ。でもわざわざ論文に  
何時頃次の地震がおこるとは書きませ  
んからね。」とおっしゃる。

楠「生越先生に伺ったら、他の学者  
も言っているけれど、わざわざ他の学  
者は書いていないとのことです。べつ  
に論文は生越先生のものだけあればい  
いでしよう。一人でも学者が書いてい  
ればいいのではないですか。」

この部分は最後まで自説か他説かと  
しつこく聞かれた。「自説でもあり、  
他説でもある」と答えても他の学者の  
書いたものがないと納得しないのだ。  
最後に東京大学出版会の『日本の活断  
層』の普及版の解説書に「海の巨大地  
震の発生間隔は数十年から数百年で比  
較的短く」とかかれた部分があったの  
でそれを示すとやっと納得したようだ  
った。

他県の死者の内訳を示せ

広告代理店Sさん「十勝沖地震の死  
者が青森四七人、その他五人と書いて  
あるところで、他県の死者の県別内訳  
が必要だといっています。」

楠「理科年表にも死者五十二と書い  
てあるのを資料としてつけてあるし、

他県の内訳がなんで必要なんですか。」  
広告代理店Sさん「そうなんですすが、ほしいっていうんです。」

生越先生の論文に書いてある部分を送り、さらに図書館にいき、日本電気協会の『わが国の歴史的地震被害一覧表』のコピーを入手してそれをつけくりアールした。

二十七年前の六ヶ所村の敷地付近の地震被害の証拠を示せ

広告代理店Sさん「過去に敷地またはその近傍に最大の被害を与えた地震は一九六八年の十勝沖地震であるのに——というところですが、具体的に敷地に影響を与えたという証拠、新聞記事かなんかをつけると言っています。」

楠「二十七年前には六ヶ所村には核燃はおろか石油備蓄基地だつてつくられていなかったし、田舎で人口も少なくて新聞記事になんかなっていいないと思えますけれど。」

しかたなく当時の朝日新聞の縮刷版を調べた。するとこの地震では、八戸飛行場の管制塔が壊れ、三沢飛行場も使えなくなり、三沢商高が壊れ、むつで農業用水が決壊、青森の青函連絡船の待合室が崩れおち、東北、北海道南部の鉄道網が脱線やレールや鉄橋のひびでズタズタになり、水道、ガスは止

まり、火災や土砂崩れも起きてたいへんだったことを知らせる記事が連日の紙面を埋めていた。しかし、東北町や、五戸町、六戸町の被害記事はあるが、六ヶ所村のものはない。交通、通信も途絶え孤立している村落もあるという記事もあり、村のものは記事になっていなかった。これらの記事と震度分布図をつけ、「六ヶ所村も近隣の被害の出た市や町と同じ震度六に近い五

の区域に入っている。だから、六ヶ所村だけ揺れなかったということではない。田舎で死者が出なかったたので、新聞記者が取材にいかなかったために記事になっていないと考えられる」と説明をつけ、やっと納得してもらった。

ウラン濃縮工場はまだ出来ていないのではないか  
広告代理店Sさん「ウラン濃縮工場はまだ出来ていないのではないか、次の低レベル放射性廃棄物貯蔵センターというの、高レベルの間違いだらうと言っています。」

楠「新聞社に勤めているのに、新聞を全然読んでいないみたいは何も知らないんですね。ちゃんとウラン濃縮工場も低レベル放射性廃棄物貯蔵センターも稼働しているんです。」

広告代理店Sさん「それが分かる資

料をお願いします。」そこで、……やつとのことで、一九九四年六月七日東京新聞の『青森の原燃施設ルポ』という記事を探した。「この日は濃縮工場が二月に起きたトラブル以来三カ月ぶりに操業を開始した日」「原発から出される低レベル放射性廃棄物を埋設する、いわばごみ処理場が埋設センターだ。屋外の埋設地区に運び込む。何重にもコンクリートなどで固められ埋められていく。現在二万八千本を埋めた。」「再処理工場の工事現場には五十数本の太いクレーンがひしめき、超大型三二トンダンプが並ぶ」といったところにラインを引き資料とした。

このような、ちょっと信じられないような審査風景が全部で一二項目にわたって回顧され、記録されているのである。当事者の楠さんは、その感想を、「本当に腹立たしく思うのは、原発推進派の広告では、明らかに間違えだと思われるような表現がフリーパスで許されているのに、私たちの広告においては正しいことまでも訂正させようとする広告審査の姿勢である。……何故言論機関である新聞社の素人の審査担当者が専門家の論に検閲まがいのことを言うことが許されているのだろうか。よく事件、事故がおこる

と専門家のコメントが載るが、そのような新聞社の責任において載せる記事においてだって、専門家に膨大な根拠を示す資料を要求して審査したりなどしないだろう。……他県の死者の数の内訳を要求するなどは、広告審査を長引かせて、広告を希望期日に載せないためにやっていることのように感じられた。」とのべている。楠さんは最後の部分で「広告代理店Sさん」にはその労に対して謝辞をのべているのであるから、この審査についての疑問は、板挟みになった広告代理店に対してではなく、新聞社そのものに向けられねばならないもののように思われる。

### 三 広告に期待されるもの

私は、マスコミの広告審査については、日本広告審査機構（JARO）の行っている努力のことなども聞いたこともあり、それなりの敬意も抱き、かつ深い関心を寄せているものであるが、楠さんが経験したような、こんな審査が行われているということには、驚きを通り越して啞然とする思いであった。他方で、マスコミ界は、たとえば消費者に被害を及ぼすような——多重多額債務を結果する

